

学習
科学

企業 ▶ 留学 ▶ 大学院 ▶ 大学教員 ▶ 日本科学未来館副館長 ▶ 大学教員

知りたい! 役に立ちたい! 表現したい!

美馬のゆり (公立はこだて未来大学 教授)

仕事の内容とやりがい

学部ではコンピュータ・サイエンスを学び、それを教育場面に活かすために、大学院で教育学と認知心理学を学びました。当時は別々の分野だったものが、現在では融合し、「学習科学(Learning Sciences)」という新しい分野として立ち上がっています。人が学ぶとはどういうことかという学習モデルをたて、それを活かした場をデザインし、実践し、振り返り、そこからデザイン原則を導き出し、モデルを改良していく。知る喜び、人の役に立てる喜び、創る喜びは、何ごとにも代えがたいものです。

仕事と生活のバランス

炊事、洗濯、掃除は普通の人以上に、こなすようにしてきました。いかに時間を捻出し、効率よく行うかというパズルを解くようで、楽しんでやっています。特に料理や裁縫のような、味わったり、使えたり、人に喜ばれるものをつくることは大好きです。効率化を考える上では、食器洗い機、ガスの衣類乾燥機、お掃除ロボットは欠かせません。趣味は料理と仕事。仕事が趣味だというと、中身のないつまらない人間に思われるかもしれませんが、好きなことを仕事にできていると思うと、こんなに幸せな人生はありません。

進路決定のきっかけ

小さい頃から算数や理科が好きでした。まわりからは理屈っぽい子だといわれました。中学高校は女子校で、数学部に所属し、パズルを作って解いたり、プログラミングをしていました。ある日、顧問の先生がコンピュータ・メーカーの見学に連れていって下さいました。当時まだ珍しかったコンピュータの動作に驚き、これは世の中を変えるに違いないと感じ、だから私は中身を知りたい、そして携わる仕事がしたいと思いました。この日の入場券は今でも大切に持っています。1977年2月8日、まさに私の人生が決った日です。

進路選択に対するメッセージ

新しいことを知りたい、人の役に立ちたい、表現したい。この3つが、人間が本来持っている欲求だと考えます。表現したいとは、何も芸術家だけではありません。数式で表現する、モデルをつくることだって表現活動です。この3つの欲求のうちのどれが強いか、あるいはどんなバランスかは、人によって異なります。あなたはどうか。それを実現するためには何が必要か、まわりをいろいろ見てみましょう。それが見つかったら、あとは前進あるのみ。途中で変わったって、自分の力で食べていけるようなら、それでよし。

海外留学・勤務を通じて得たこと・得したこと

24歳で米国の大学院に留学し、こんなに生きやすい世界があるのかと感じました。3つの象徴的なことは、①赤い服を着てもよいこと、②感情を顔に表してもよいこと、③意見を述べてもよいこと、です。顔立ちがはっきりしていることから、日本では目立つ服装や発言、感情を顔に出すことは、幼い頃から、学校でも、家庭でも、注意されて抑えられてきました。「なぜあなたのような素敵な黒髪を持っている人が赤い服を着ないの?」という米国人の友人のひとことが、私の心を解放しました。今では、私の大好きな色となっています。

海外の女性研究者の活躍と位置づけについて感じたこと

性別や人種、年齢に関わらず、業績があれば、独立した研究室を持てることは驚きでした。しかしながら、研究で実績を上げてさえいればよいわけではなく、自分で研究資金や若手のための資金調達までやる必要があります。一国一城の主のようでもあり、中小企業の経営者のようでもあり。一方で、学生たちの学ぶ意欲や、キャリアを積むことへの意識の高さは、とても印象的でした。教育を授ける方と受ける方と間に、暗黙の契約関係があり、各人が責任を持って活動していると感じました。

海外留学・勤務を決めたきっかけについて

学びたいことが、当時まだ日本の大学にはなく、米国に留学したいと思いました。奨学金について留学先に尋ねましたが、豊かな日本は自国で探すようにといわれました。そこで、米国のコンピュータ・メーカーの日本支社に勤め、留学資金を貯めました。その後私費で留学し、最初の半年を終えたところで、(財)数理科学振興会から残りの半年間、奨学金をいただくことができました。大学に勤務後、文部省の在外研究員として以前学んだところに小学生の息子を伴い7カ月滞り、大学の研究・教育・運営や、米国での生活について、学生時代とは異なる視点でいろいろ体験することができました。

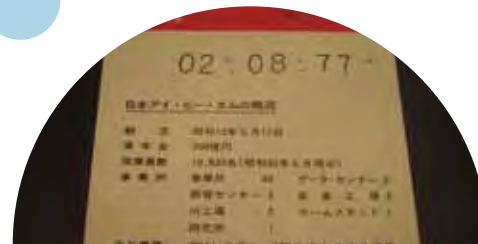
滞在先の思い出・生活者としての体験

料理という技能が身を助けることを強く感じました。当時私のいたボストン、ケンブリッジでは、日本食がブームでした。日本の家庭料理を一度に数名分作って招待すると、その数名が後日一人ずつ、レストランに連れて行ってくれました。当時1ドル250円という中、貧乏学生の私にとっては、外食、ましてや高級レストランに行けるのは夢のようでした。クリスマスやイースター休暇で友人の実家に招待されたときも、大変喜ばれました。私たち日本人の日常の食事が、健康的なものであることにも気づかされました。



<美馬のゆり(みまのゆり)プロフィール>

女子の中高一貫校から、計算機科学科へ。学生時代アルバイトで、MITの教育用プログラミング言語に出会ったことで、留学したいと一念発起。合格したものの奨学金が得られず断念。外資系コンピュータ・メーカーに勤務。翌年合格先から問い合わせが来て、休職して留学しようとしたが、折り合いがつかず退職し、留学。修士号取得後、帰国。当時興りつつあった認知科学を学ぶために大学院入学。その後大学で職を得るが、大学新設の計画策定の話が舞い込み、仲間と共に大学を一から企画。開学と同時に家族で北海道に移住。同時期に日本科学未来館の立ち上げにも関与し、副館長として3年間勤務(単身赴任)。大学に戻る。



人生を決めたコンピュータ・メーカー見学のチケット